CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

介護福祉教育における海外研修実践の評価

中 根 淳 子
田 中 厚 子*
田 中 隆 治**

はじめに

社会福祉の分野においてカナダはいろいろな試みを繰り返し実践し、世界的にも高い水準の充実した基盤を築いてきた。そのカナダの高齢者介護の現状を知りたいという素朴な欲求が、以下に述べるセント・ローレンス・カレッジ老年学セミナー（文中では「セミナー」とする）の原点である。名古屋柳城短期大学において高齢者介護の学習をし、これから現場に出て行こうとする学生たちの声によって始まったこのセミナーは、カナダの老年学を学ぶことを目的としているが、それと同時に異文化理解教育の実践でもあった。このセミナーの立案と実施は、老年学を通して異文化理解を試みるという新しい発想に基づいている。本論は、これまでに3回行われたセミナーを総括し、カナダの老年学を学ぶ上でどのような意義があったか、また、異文化理解はどのように達成されたかを検証しようとするものである。

本論は、第1章：研修プログラムの立案と実施、第2章：セミナーの実施とその特徴、第3章：セミナーの評価の3章から成り、第2章および第3章において概略的な結論を導いた。

第1章　研修プログラムの立案と実施

1．セミナー成立の経緯

1999年10月、名古屋柳城短期大学の学生達の要請を受けて、著者の田中隆治は研修プログラムの立案・実施のための交渉をセント・ローレンス・カレッジと開始した。セント・ローレンス・カレッジは、オンタリオ州立のカレッジで、キングストン、ブロックビル、コーンウォールの3市にキャンパスがあるが、老年学(Gerontology)のプログラムを提供しているのはキングストン校、人間関係学部（Human Studies）である。そのプログラムは健康・保健学的な観点と心理・社会学的な観点から老年学を捉えた点で他カレッジと一線を画している。

交渉の窓口となったのはブロックビル校でセミナー等を企画・実施するセクションであるBusiness and Industry Training Servicesのジョーン・ブラッドレー氏（Ms. Joan Bradley）で、実務的な交渉はキングストン校事務局のボブ・マッカラム氏（Mr. Bob MacCallum）との間で行なわれた。最終的な契約は2000年1月に締結された。なお、契約は1回のセミナーに対するものであり、前年の実績をもとに内容や費用の見直しを行い、新たに交わすことを原則としている。

カナダのカレッジが日本の短期大学と基本的に異なる点は、政府関連のプロジェクトの請負や、企業や一般人に対してビジネス・セミナーなどを立案・実施するという側面を持っていることである。したがって日本人のためにセミナーを立案・実施すること自体に問題はなかったが、セミナーの組み立て等に関しては、我々とカレッジの学科との間での様々な調整が必要であった。初期段階において、セント・ローレンス・カレッジは、老年学に関するセミナーや、相手の要望にあわせて作るセミナーの前例がないという理由から消極的であった。また、英語を母国語としない日本人に対して、一週間という短い期間に何を提供できるかといった点が障壁となった。しかし、数回の話合いを経て、このセミナーが新しい教育的挑戦であることを理解し、最大限の協力を約束してくれた。我々は、カナダ人学生に混じって講義を

*アクセス住環境研究所代表
**日本工業大学　工業教育研究所　助教授

受けること、そして、できるだけ多くの高齢者介護の現場を訪れ、実地研修を行うことを要請した。前者は問題なく認可されたが、後者に関しては、施設見学は可能だが実習は法的に困難であるということであった。

具体的なプログラムの設定は、我々の要望書をもとに、カレッジの事務局が歓迎式・昼食会や研修用教材の準備、送迎バスやホテルの手配などを行い、人間関係学科のスーザン・チェンバレン教授（Prof. Susan Chamberlain）等が、講義科目と講師の設定、カレッジ授業に参加するための準備、見学施設の選定と交渉等を行なった。事務局と学科との間にセミナーへの意識の違いがあり、特に修了証（Certificate）授与について、英語を解さない学生への実質5日間の研修に対して修了証の発行が妥当であるか否かが問題となったが、両者ともこのプログラムを異文化理解教育の一環として捉えるということで承認された。

カレッジ側の最大の懸念は、日本人参加者の英語力であった。これに対し、我々は可能な限りすべて通訳するという原則で対応した。第1回は田中厚子がすべての通訳を担当し、第2回からは田中厚子と、正看護師（Registered Nurse）であるマリコ・フェアヴァーグ氏（Ms. Mariko Farevaag）の2名で行なった。

2．オンタリオ州立カレッジのシステムと老年学

ここでオンタリオ州の州立カレッジのシステムについて少し説明しておきたい。

オンタリオ州立応用技術・工科短期大学（The Ontario Colleges of Applied Arts and Technology、略称CAAT）は、高度な技術をつける職業訓練への需要の高まりを受け、オンタリオ州議会の議決を経て1965年に創立された州立のカレッジ群である。これらのカレッジの特徴は所在地域の産業のニーズに対応したプログラムを提供するところにある。創設当時はオンタリオ全域に23校であったが現在は25校に増えている。2001年の全日制学生数は14万人以上である[3]。1992年には、80万人のパートタイム（主として科目等履修生）の学生を有し、教師数は約6500名であった[4]。

CAATの特徴は総合大学と比較して、より実践に力を置いた教育をするところにある。要するに卒業後に即戦力になる知識や実践的技術を習得するように構成されている。全日制のプログラムには、保健健康学関連、社会福祉学関連、マスコミ学関連、商業美術、情報処理関連、一般教養があり、これらの分野をさらに細分化してプログラムが用意されている。その数は1000以上にものぼる[5]。各カレッジの学校案内書を詳細に見ると、頻繁にプログラムが再編成されており、より現実に即したプログラムを提供していこうという姿勢が見受けられる。

1990年代初頭、オンタリオ州の多くのカレッジは、日本人留学生を受け入れるため数校ずつグループ（Consortium）を作り、日本の市場で積極的な広報活動を行った。異文化教育の実践としてカナダのカレッジに注目した田中隆治は以来、オンタリオ州の数々のカレッジに留学生を送るなど協力関係を築き、1993年にはセント・ローレンス・カレッジ・ブロックビル校で客員教授として日本に関する集中講義を行った。このような長年の信頼関係をもとにこの老年学セミナーは実現されている。

オンタリオ州の老年学に関する卒業資格を得ることのできるプログラムを提供しているカレッジは、カレッジ総数23校のうち18校であった[6]。しかし、現在カレッジ総数25校のうち老年学に関するプログラムを持つカレッジは8校に減少している[7]。セント・ローレンス・カレッジのキングストン校で老年学プログラムが開始され

[3] Communi CAAT *HORIZONS* が改定されたもので，カレッジだけの情報を掲載している。2001年版より。
[4] オンタリオ高等教育省（Ministry of Colleges and Universities）発行のカレッジ及び大学案内 *HORIZONS* 1992年版より
[5] 註3に同じ
[6] 註4に同じ
[7] 註3に同じ

たのは、1988年の9月である。以後先駆的存在として、オンタリオ州立カレッジの老年学プログラム拡大の機動力となった。看護師養成の観点にたった複合専門科目としての老年学ではなく、社会福祉指導員（主事）養成のプログラムを州規模で運営するよう州政府に働きかけこれを実現した。現在このプログラムの卒業者は専門組織、すなわち社会福祉士や社会福祉事業担当指導員の協会員として認知され州政府の登録社会福祉士になることができる。

しかし、2001年の統計では老年学を扱うカレッジは減少し、州の予算処置やカレッジの経営状況に影響されセント・ローレンス・カレッジ・キングストン校の老年学専攻科もまた2002年度から廃止された。老年学関連の科目は多少残るが、学科として成り立たなくなっている。一番大きな原因は学科の在籍者数の減少にある。この傾向は他の多くのカレッジでも同様である。ちなみに、セント・ローレンス・カレッジのブロックビル校には短大卒業資格のあるものを対象にした通信教育としての老年学のプログラムが残っている。

3．本セミナーにおける事前教育

このセミナーの特色のひとつは、事前教育である。ただ単にカナダでのセミナーに参加するのではなく、文化や言語のまったく異なる国でセミナーを行う意義を認識し、そこで最大限学ぶためには異文化理解を前提とした事前教育が必要である。

毎回3月初旬にセミナーを実施するため、事前教育は毎年1月（または前年12月）と2月に各1回、名古屋柳城短期大学実習室にて開催した。各回6時間、合計12時間程度、田中隆治による講義を中心とした以下のような事前準備教育を行った。

①異文化におけるコミュニケーション・パターンの理解
- 自分の思考や行動を北米パターンと比較し日本人の特性を認識する。
- 非言語コミュニケーションの重要性を認識する。
- 異文化間における問題の解決方法などを考え、思い込みや偏見を取り除く。

②参加者の研究テーマの設定
- カナダの高齢者介護の分野で特に興味のあることや調べたいことを考える。

③セミナー全体の理解
- このプログラムについての理解、理念、条件、システムなど詳細に確認する。

④事前教育に関する理解
- 事前教育の目的や位置付けを確認する。

⑤カナダに関する理解
- 気候風土
- 多文化国家としての成り立ち

⑥セミナー実務関連の理解
- 旅程説明、渡航関連事務手続き等の確認、持ち物についての説明

なお事前教育の教材としては、田中隆治『外国人から見た日本人』1995年、『日米文化比較』1995年、『非言語コミュニケーション・パターン』1996年、『異文化間の問題解決パターン』1998年、『Diversity, That Is What We Need Now』2000年（以上私家版）等を用いた。

最終的にこの研修が与えられたものではなく自分たちの発意によって立案され実施されているという意識を再確認することが、事前教育の最大の目的である。異文化理解とは、自分が属する文化を再確認する作業といいかえることができるが、このセミナーが参加者にとっての自己発見と自己実現の契機となるためには、事前教育が不可欠である。

第2章　セミナーの実施とその特徴

1．セミナーの実施

ここでは、過去3回実施したセミナーの具体的な内容について述べたい。このセミナーの特徴は、**①施設見学**、**②専門講師による講義**、**③カレッジの授業に参加**、**④カナダの学生および教職員等との交流**という4つの研修活動を複合的に組み合わせたところにあるが、第1回から第3回の研修において、これらの研修内容がどのように実施されたかを検証する。以上の4つの範疇にはいらない観光等の行動は⑤とした（**表1**）。なお、以下のリストにおけるカレッジは、セント・ローレンス・カレッジ・キングストン校を指すものとする。

表1．これまでのプログラム（1）

第1回セミナー（2000年3月4日～8日）　参加者学生16名、教員3名 ― 計19名		
第1日	歓迎会・オリエンテーション	④
	キングストン市内見学	⑤
	カナダ人家庭でホーム・パーティー	④
第2日	講義1「カナダの老年学と公的政策」	②
	講義2「高齢者のための地域サービス」	②
	講義3「キングストンのアルツハイマー協会」	②
	講義4「高齢者のためのセラピューティックレクリエーション」	②
	講義5「長期型介護施設におけるアクティビティとレクリエーション」	②
	講義6「高齢者と家族介護」	②
第3日	カレッジの授業「アクティビティとレクリエーション」	③
	カレッジ施設見学	①
	カレッジでの昼食会	④
	施設見学「プロビデンス・マナー　Providence Manor」	①
	「デイケア・センター」	①*
第4日	施設見学「ヘレン・ヘンダーソン・ケア・センター　Helen Henderson Care Center」	①
	「デイケア・センター」	①*
	カレッジでの授業「老年学」	③
	施設見学「セント・メリーズ・オフ・ザ・レイク病院イージアー・リビング・センター St. Mary's of the Lake Hospital, Easier Living Center」	①
第5日	施設見学「グッド・コンパニオン・センター　Good Companions Center in Ottawa」	①
	オタワ市内見学	⑤

*幼児教育を専攻する3名の参加者は、高齢者施設のかわりに幼稚園を見学した。

第2回セミナー（2001年3月3日～7日）　参加者学生10名、社会人3名、教員3名 ― 計16名		
第1日	歓迎会・オリエンテーション	④
	カナダ人家庭でホーム・パーティー	④
	馬橇体験	⑤
第2日	講義1「カナダの老年学と公的政策」	②
	講義2「高齢者のための地域サービス」	②
	講義3「キングストンのアルツハイマー協会」	②
	講義4「高齢者のためのアクティビティとレクリエーション」	②
	講義5「カナダの家族介護」	②
第3日	施設見学「ヘレン・ヘンダーソン・ケア・センター　Helen Henderson Care Center」	①
	カレッジ施設見学（職員と学生のための保育園を含む）	①
	カレッジでの昼食会	④
	カレッジの授業「老年学における諸問題に関するディベート」	③
	カレッジの授業「レストラティブ・ケア」	③
	学生との交流夕食会	④
第4日：ブロックビルにて施設見学		
	「シャーウッド・パーク・マナー　Sherwood Park Manor」	①
	「VON（Victoria Order of Nurses）」	①
	「リージョン高齢者アパート」	①
	「メイプル・ビュー・ロッジ　Maple View Lodge」	①
第5日	施設見学「プロビデンス・マナー　Providence Manor」	①
	カレッジでの昼食会・修了式	④
	市内ショッピングセンター	⑤

第3回セミナー（2002年3月2日～6日）　参加者学生7名、社会人1名、教員　2名―計10名		
第1日	歓迎会・オリエンテーション	④
	カナダ人家庭にてホーム・パーティー	④
第2日	講義1「カナダの老年学と公的政策」	②
	講義2「高齢者のための地域サービス」	②
	カレッジ内ネイティブ・スチューデント・センターにて昼食会	④
	講義3「アルツハイマー症：カナダはどう対応しているか」	②
	講義4「高齢者のためのアクティビティとレクリエーション」	②
	講義5「カナダの家族介護」	②
第3日	施設見学「リドークレスト・ホーム　Rideaucrest Home, Municipal Home for the Aged」	①
	施設見学「アルツハイマー・ソサエティと高齢者虐待対策室」	①
	施設見学「シニア・アソシエーション　Senior Association」	①
	カレッジのカフェテリアで昼食	④
	カレッジ・キャンパス見学（学生寮・保育室を含む）	①
	授　　業「家族の役割」	③
	学生との交流会（オプション）	④
第4日：ブロックビルにて施設見学		
	セント・ローレンス・カレッジ・ブロックビル校見学	①
	施設見学「セント・ビンセント・デ・ポール病院デイケア　St. Vincent de Paul Hospital — Day Care for Seniors」	①
	ブロックビル校カレッジ内食堂にてブロックビル市長を招いた昼食会	③
	施設見学「VON（Victoria Order of Nurses）」	①
	施設見学「リージョン高齢者アパート」	①
	施設見学「メイプル・ビュー・ロッジ　Maple View Lodge」	①
第5日	授　　業「アクティビティとレクリエーション」	③
	学生との昼食会・修了証授与式	④
	施設見学「ヘレン・ヘンダーソン・ケア・センター」（アクティビティに参加）	①

2．プログラムの特徴

このプログラムの特徴は、**①施設見学、②専門講師による講義、③カレッジの授業に参加、④カレッジの学生との交流**という4つの研修活動を複合的に組み合わせたところにある。①②③は、専門分野としての老年学を学ぶためであり、④はカナダ人との交流を通して異文化を学ぶためである。しかし異文化理解教育という観点からみれば、①②③の学習すべてが異文化理解のために役だっているということができる。

①施設見学

見学した施設は、以下の4種類に分類される**(表2)**。Aのロングターム・ケアおよびナーシング・ホームとは、介護を要する高齢者の入所型施設（日本の特別養護老人ホーム等に相当）で、Bのデイケア・センターとは、日本のデイ・サービス・センターに相当するもので、Cのシニア・アパートメントとは、高齢者のみが居住できるアパートをさし、Dに、その他の関連施設をまとめた。

第2回目からブロックビルでの施設見学を加えたのは、ブロックビルが人口2万人足らずの小都市であるがゆえに、高齢者介護のシステム全体が把握しやすいという理由からである。ここで、公的長期療養施設、私立老人ホーム、高齢者アパートという3種類の施設を見学し、またVON（Victorian Order of Nurses[8]）において、ボランティア組織の活動を学ぶというように、アクセスセンターを中心とした地域介護の実態がわかるようにプログラムを組んだ。すなわち、地域毎の

[8]家庭訪問看護を行う非営利団体で，カナダ健康省，ユナイテッドウェイその他からの寄付により設立された。登録したボランティアによって，送迎サービス，食事サービス，在宅訪問，電話訪問，ミールズ・オン・ホイールズなどが行われている。

表2．見学した施設の分類

A	ロングターム・ケアおよびナーシング・ホーム	プロビデンス・マナー（キングストン）、ヘレン・ヘンダーソン・ケア・センター（キングストン）、シャーウッド・マナー（ブロックビル）メイプル・ビュー・ロッジ（アセンズ）、リドークレスト・ホーム（キングストン）
B	デイケア・センター	グッド・コンパニオン・デイケア（オタワ）、セント・ビンセント・デ・ポール病院デイケア（ブロックビル）、シニア・アソシエーション（キングストン）
C	シニア・アパートメント	リージョン高齢者アパート
D	関連施設	イージアー・リビング・センター（介護用品体験施設、キングストン）、VON、アルツハイマー・ソサエティ、高齢者虐待対策室

アクセスセンターに連絡→アクセスセンターにてアセスメント→インタビュー→入居施設の選択、在宅の場合はボランティアの手配、という介護を巡るシステムを実際に目で確かめようと試みたのである。しかし、1日で6箇所を越える施設を廻るため、見学時間が十分取れないということが課題として残った。

毎回訪問したヘレン・ヘンダーソン・ケア・センターでは、入居者のアクティビティ活動に参加した。第1回目は花束、第2回目は造花、第3回目はビーズの腕輪を入居者とともに制作しながら交流するという、施設見学の枠を越えた体験をすることができた。

②専門講師による講義

毎年、専門講師による講義を第2日目に集中して行っており、各講義を総合すると「カナダの老年学概論」と呼ぶことができる構成になっている。講師はセント・ローレンス・カレッジのスーザン・チェンバレン教授とエリザベス・ウズマ教授（Prof. Elizabeth Woudsma）が中心であるが、キングストン地域よりアルツハイマー協会会長やカナダで多くの施設を運営しているエクステンディケア・コーポレーションの現役コーディネーター等を招いている。講義タイトルと講師は以下の通りである。

a）「カナダの老年学と公的政策」
　エリザベス・ウズマ教授

b）「高齢者のための地域サービス」
　スーザン・チェンバレン教授

c）「アルツハイマー症：カナダはどう対応しているか」
　キングストン市アルツハイマー協会会長カレン・ギル氏

d）「高齢者のアクティビティとレクリエーション」
　ドーン・ボールドウィン氏
　（エクステンディケア／アクティビティ・コーディネーター）

e）「高齢者と家族介護」
　スーザン・チェンバレン教授

f）「高齢者のためのセラピューティックレクリエーション」（第1回のみ）
　バイオレット・イヴァノビッチ氏
　（レジャー・エッセンシャル・レクリエーション・ディレクター）

授業は、パワーポイントや、OHPを用いて視覚的に理解しやすいように行なわれた。また、参加者に渡されるテキスト一式のなかに、各講義の要点が英文で記されており、さらに逐次通訳が日本語に訳すので、講義を理解することに問題はなかった。

b）では、事前にケーススタディのための課題が与えられたので、その日本語訳をグループごとに検討し、日本語で発表するという方法を採った。d）では、実際に施設で使用している介護機器や用具を参加者に体験させながら授業を進めた。a）とe）では、自分が高齢になったときの姿やジェノグラムという家族関係図を描くなど、参加者主導型の理解しやすい授業が行われた。

Novak と Campbell によれば、老年学の目的は「加齢について学ぶこと、そしてその知識を高齢者の生活の向上に役立てること」であるという[1)]。

1日という短い時間の中に組み込まれたこれらの講義は、高齢者の生活の向上を考えさせるという点で適切に構成されていると言える。

③カレッジの授業

第1回「アクティビティとレクリエーション」
「老年学に関するディベート」

第2回「老年学における諸問題に関するディベート」
「レストラティブ・ケア」

第3回「家族の役割」
「アクティビティとレクリエーション」

授業は毎年、1科目はディベート形式、1科目はプレゼンテーション形式をとっているため、日本人学生に新鮮な印象を与え、異文化理解の面で非常に有意義であった。第3回目の「家族の役割」では、セミナーに出発する前から日本人の死生観や痛みの表現について課題を与えられていたため、議論に入りやすく日本人としての意見を発表することができた。毎回、カナダの教師および学生から日本の福祉・介護についての質問を受けるが、そのことで両国の違いに気づいたり、日本を再評価するきっかけとなったりすることが多く、具体的な学習体験として成果をあげている。

④交　流

カナダ人との交流には3段階あり、第1は歓迎会や修了証の授与式などプログラムのなかで公式に行なうもの、第2はカナダ人家庭でのホーム・パーティーのように地域の人を含めて行なうもの、第3はカナダ人学生が主催するお別れ会のような任意の交流である。

まず、歓迎会は、キングストン市長、セント・ローレンス・カレッジ学長、学部長等の挨拶、学生代表の挨拶、日本人参加者代表の挨拶、プログラムのオリエンテーション等が和やかな雰囲気のなかにも格式をもって進行した。修了証の授与式も同様であった。

ホーム・パーティーは、カレッジの教職員、学生に加え、地域の高齢者を数名混えて、家庭的なもてなしを受けた。住宅の各部屋も見せていただき、カナダの地域・家庭の様子を垣間見る機会となった。このホーム・パーティーを初日に経験することで、その後の講義や見学の受け止め方がより身近なものになると思われる。

カレッジ内カフェテリアでの簡単な昼食会、最終日の夜のパブでの交流会などは相方の学生が積極的に会話するので、通訳がいなくとも十分交流が成立していた。

以上の交流の範疇には入らないが、2つの授業(「家族の役割」「アクティビティとレクリエーション」)に参加して日本の事情を伝える機会をもつことにより、一方からの伝達ではなく双方のコミュニケーションが成り立つ体験をしたことは意義深い。

第2回から、カナダの学生との交流がより円滑に行われるよう、カナダ人学生2名が日本人学生の施設見学などに同行してくれるようになった。この2名の学生とは特に親しくなることができており、こうした配慮が重要であることを痛感する。

最後に、施設見学における交流としてヘレン・ヘンダーソン・ケア・センターにおけるアクティビティへの参加に注目したい。アルツハイマー症を含む車椅子の高齢者約10名とともに過ごす1時間の間に、学生は言葉がなくとも交流できることを体験する。毎年訪問しているうちに先方も我々の訪問を楽しみにしてくれるようになった。異文化交流の一例として特記しておきたい。

3．まとめ

以上のように、3回の研修内容から、このプログラムが多面的かつ総合的に老年学を学ぶと同時に異文化理解教育として段階的な交流を可能にしていることが分かった。

Gerontological Nursingのなかで、Eliopoulosは、ホリスティックな介護について、「ホリズム(Holism)とは個人の全体を形成する生物的、心理的、社会的および精神的な次元をさし、それは各部分を凌駕するものである。ホリスティックな高齢者介護は、多方面に渡る知識や技能を駆使して、利用者の身体的、情緒的、社会的、精神的な健康を促進することである。」と述べているが[2)]、3回の研修内容が包括したものは、カナダのこの姿勢そのものに他ならない。

ホリスティックな老年学教育 ＋ 異文化理解教育

異文化理解教育という点では、第3回目にカレッジ内のネイティブ・ステューデント・セン

ターにおいて、ネイティブ・インディアンの工芸や祈りの儀式に接する機会を得たことを特記したい。カナダはモザイクの国であるといわれるが、日本人からみると西欧からの移民の集合体であり、先住民であるエロクワ族やモホーク族らへの認識は低い。参加者のより広範な異文化理解を可能にしたということができる。

小出が述べるように「誰もが尊重される社会」[3]であるカナダは、制度や形式ではなく本当に人を大切にすることを優先している。特にボランティア意識の違いは顕著で、施設の入居者数以上にボランティアがおり、シニア・アソシエーションが「高齢者による高齢者のためのセンター」をモットーに掲げるように高齢者のボランティアが多い。カナダの老年学を学ぶことはすなわち異文化を学ぶことである。

この研修プログラムの特徴は、5日間という短い時間のなかで、多様なカナダの介護事情、特にこれからの介護が目指すホリスティックな介護への試みを学び、同時に異文化理解を深めることができるという点に集約される。

第3章　セミナーの評価

1．海外研修の評価方法

このセミナーは、何もないところから手探りではじめたものであり、評価することを意識して開催したものではなかったということは冒頭に述べておくべきである。しかし、現在までに3回のセミナーを終え、今後もこのセミナーを意義のあるものとして継続させていくためには何らかの形できちんと評価する必要がある。

本セミナーは、参加者が「高齢者介護の先進国であるカナダの現状を学び、自分の職業（学業）に生かす」「カナダで学ぶことにより、自分の生き方について考えるきっかけとする」ことを目的としてこれまで3回開催されてきた。それらを達成したかどうかを判断するための資料としては、セミナー参加者の感想文に加え、第2回、3回終了時のアンケート結果がある。感想文は帰国後1か月くらいの間に提出させたものでA4の用紙に2枚程度という条件のみで記述させた。第2回のアンケートはセント・ローレンス・カレッジのエリザベス・ウズマ教授が研修中の一つ一つのプログラムすべてに対し感想を記述させたものである。第3回のアンケートはセミナー全体に対する感想と要望を著者らが記述させたもので、前者と同一のものではない。なお、第2回のアンケートはマリコ・フェアバーグ氏によって日本語から英語に翻訳されたもののみが現在保存されており、原文は入手できなかった。本来すべてのセミナーの評価を行うべきであろうが、原文でアンケートと感想文の両方がそろっているものは第3回のもののみなので、今回それらを分析することにした。

介護福祉教育における海外研修の報告書は多くあるが、評価の方法について記したものはほとんどない。評価は2つの側面から行う必要があるだろう。ひとつは第2章に述べたように、主催者側から見て成功的な研修であったかどうか、もうひとつは個々の参加者が目的を達成したかどうかということである。2つの側面は相反するものではなく、参加者が目的を十分達成すれば当然全体としてその研修は成功であったと言えるだろう。

この章では参加者のアンケートおよびセミナーの過程を分析することにより、満足のいくものであったかどうかを述べ、その上で異文化教育に関する文献を参考にしながらセミナーを評価してみたい。

佐野らは異文化教育の評価の難しさや、現在まで評価が正しく行われてこなかったことに触れているが、以下の3面から行う方法を提言している[4]。

1．異文化についての情報をどれだけ正確に習得したか
2．異なる価値観を理解し、自己中心の発想からどれだけ脱却できたか
3．積極的に、かつ効果的にコミュニケーションできたか

この方法は介護福祉教育における海外研修の評価にそのまま当てはまるものではないが、現在そのような評価基準がないため、この3点を基準にして各項目に関連するような記述をアンケートと感想文の中から拾って分類した（**表3**）。アンケートは、セミナー終了時に現地で記載してもらったもので、A5サイズに、General Com-

表3．アンケート　無記名（8名：A～Hさん），感想文・記名（8名：ア～クさん）の分類

（文章は紙面の都合上、内容を損なわないよう配慮しながら、一部要約した）

1．異文化についての正確な情報収集

- カナダのスケールの大きさに驚いた。学校も広いし、食べ物のサイズも大きいし、人々の心も大きいと感じた（B）。
- 施設見学は丁寧に説明してくれてよかった（B）。
- 講義は、机に向かっただけのものではなく、参加している実感があり、関心を持ち学べた（イ・エ・カ）。
- 現地の学生が積極的な姿勢で授業を受けているので感心した（A）。
- どの施設も建物全体が明るい。部屋の壁の色がカラフルで施設という感じがしない。施設の人も「家庭らしく」しようとしている。窓が大きく豊かな採光。ほとんどが個室で、トイレと洗面所だけが2人で共有。家具は自分のものを持ってきて家族の写真も飾ってある。部屋に個性がにじみ出ている。服装も鮮やかな色づかいでお化粧をしている人も多い（A／H，ア・イ・ウ・エ・オ・カ・キ・ク）。＊1
- 職員の付き添いなしでも自由に出られる中庭があるのに驚いた（キ）。
- 施設のアクティビティー・プログラムが充実している。男性参加者が多いのも印象的（エ・キ）。
- アクティビティー専門のスタッフが利用者の趣味、今までの生活環境、興味を持っていることなどを考え、ニーズに合わせてアクティビティを考えている（キ）。
- ボランティアの数が多く年齢層が多岐にわたっているので驚いた。高齢者のアクティビティ施設を高齢者ボランティアが作っていることにも驚いた。時間があるので当たり前、という気持ちでボランティアをしているのに驚いた。（イ・ウ・エ・カ）
- ボランティア登録の審査が厳しい、研修制度が充実している、高齢のボランティアが多いことなどに驚いた（キ）。
- 施設利用者と、職員の会議があるのがよいと思った（ウ）。
- 施設のスタッフの数が多いのに驚いた（エ・オ・カ）。
- 痴呆などがない高齢者は1人暮らしをしていることが多いので驚いた（エ・ク）
- 教授宅に招かれ近所の高齢者とともにひと時を過ごしたが、日常的に行われていることだと知り素敵なことだと思った（E，キ）。

2．異なる価値観の理解と自己中心の発想からの脱却

- その人達一人一人の生活がある。自分の生活ができている。同じ高齢者なのに国･考え方が違うだけで、こんなにも生活、表情が変わるのだ（ア）。
- カナダであれ、だれであれ、いつでも同じ目線になり、耳を傾けじっくり関わることが大切だと感じた。どちらの施設でも言葉がけやふれあいを大切にしている。さまざまな人がいる中での思いの伝え方、聞き方、受けとめ方、言葉遣いなどについても再び考え直すことができた（イ）。＊2
- 入所待ちが多く日本と同じ（ウ）
- 保育や介護はもちろん、これから生きていく上で人とのかかわりを考えた時、ここでの温かさや、やさしさを忘れず一生懸命生きていきたい（ウ）。
- カナダのボランティアは無償。日本に有償ボランティアがあるというと驚かれた。お金を払ったほうが頼みやすいという日本人の文化を悲しく思った。日本にも無償のボランティアが増え、それが当たり前と感じられるような国になってほしい（ウ・エ）。＊3
- 日本ではボランティアを通していいことをしたという自己満足に陥ることもある。学校がボランティアをさせるのも自分の意志でないところに問題がある（エ）。＊3
- 文化の違いによる日本の有償ボランティアを即否定するのはどうか。この論議は有意義だった。ボランティアについて考えるきっかけとなった（キ）。＊3
- 老年学を学ぶ以前に、その国の歴史・文化をよく知ることが大切だと思った（H，エ・キ）。＊4
- 老年学を学ぶに当たって、まずはじめに日本の文化をよく知ることが大切だと思った。お互いの文化の違いから福祉のあり方を学ぶことが大切だと思った（H）。＊4

(cont'd)

- カナダで見たこと、学んだことを日本の施設で役立てたい。もっと日本の施設や日本の現状を調べ、カナダの学生に伝えられるとよかった（D）。
- 今後、高齢者と関わる時には今までのライフスタイルを取り入れることができるように活動したい（ア）。＊5
- 事前の課題としての日本人の死生観・痛みや苦しみの表現・権力への態度・家族の役割・男女の役割などについて考え準備したことは自分にとっても有意義であり、実際の授業の中では文化を対比させて考えることができた（キ・ク）。＊6
- 課題を通し、人を知る、家族を知るということはそれぞれの民族・歴史を知るということを学んだ。これは介護においても重要なポイントだ。日本では地域によって習慣が異なり、それも同様のことである（ク）。
- 学生が時代ごとの政治・衣服・スポーツ・音楽などについて調べ発表していたが、この意図は高齢者とのよいコミュニケーションである。日本での実習中にも感じたが、昔のことをもっと知る必要性を感じた（キ）。
- 充実したアクティビティプログラムがある一方で、フロアで何もせずボーッと過ごす利用者もいる現状は日本と変わりない（エ）。
- 独居老人が援助を求められずに亡くなることがカナダでもあり、日本と同様の高齢化に関する問題を抱えている（カ）。
- カナダでは高齢者は独立して生活していることが多いが、高齢者だけの生活には危険が多く、自分では完全に賛成はできない。非常用のペンダントを配布する制度があると聞き少しは安心した（ク）。
- カナダの高齢者は子どもと同居はしないが、近くに住むことが多く、子どもも高齢者を支えている。デイサービスも日本のように送迎サービスはない。お年寄りと家族のあり方について考えていきたい（イ・エ）。
- 就職後、日本の施設において集団生活だからといって妥協しているところ、個性がなくなりつつあるところ、個人のプライバシーについて考えていきたい（エ）。
- 実習で、人がいないから仕方がないと思っていたこともまだやれることはいくらでもあるのではないかと感じた（オ）。＊7
- カナダのよさ、日本との違い、学ぶべきところ、真似できる点はないかなど、見聞したことを伝えると同時に日本の社会に還元していきたい（キ）。
- 講義で80歳の自分を想像する課題があったが自分はネガティブな思いしかなかった。カナダの学生や教員は好きなことを継続させていくという意志があり驚いた。老いをポジティブにとらえていくことは大切なことだと思った（オ）。

3．積極的かつ効果的コミュニケーション

- もう少し早くから現地学生と交流してカナダの生活や言葉に慣れてからコミュニケーションをとるべきだった（C）。
- 学生と交流ができ、一緒に授業を受け意見を交換することができよかった（B・C・E・F）。
- 出会った人が皆暖かくよくしてくださって、学生の皆と仲良くなれて毎日充実していた（H）。
- カレッジの先生や学生が大歓迎してくれて食事をしながら片言の単語で始めて交流ができた（G，イ・エ）。
- 挨拶を交わすことで相手との距離が縮まった（オ）。
- 学生や先生方が色々な機会を作り歓迎してくれた。英語がうまく話せなくても通じ合うことができると実感した（イ・ウ・エ）。
- 言葉がわからなくても相手が自分の表情を見て気持ちを読み取ってくれることがあった。ボディ・ランゲージも有効だった。（オ）。
- わからないからといって自分から距離を置くのではなく、相手に興味を持ち、歩み寄り、しっかりと向き合うことで意志を汲み取りやすくなる（オ）。＊8
- 以前からコミュニケーションを課題として考え続けていたが研修で深めることができた（オ）。
- 高齢者とのアクティビティで、英語が話せないので不安だった。しかし一緒に話したい、ふれあいたいという思いが強く、目を見て聞き、話すということを自然としていた。涙を浮かべ何度もキスをしてくださったので胸が一杯になった（B・F，イ・エ）。
- 言葉ではなく何か感じ取るようにお互い通じ合った時は本当にうれしかった（ウ・ク）。

mentsとSuggestions for next yearの2点について日本語で自由に記述するように指示した。Suggestions for next yearは分類表には記載せず、後述する。

2．アンケート・感想文の分析とセミナーの評価

まず「異文化についての情報をどれだけ正確に習得したか」ということに関して述べよう。アンケートに記載された項目を見ると、参加者の多くが本学の学生だったため、1年間の実習で見聞した数少ないことがらや学内での学習内容のみに対比させながら情報収集していることがわかる。施設の見学などはメモを取りながらかなり細部にわたって正確に見ていることがうかがえる。しかし、たとえば利用者の自治会や施設のスタッフ数などに驚いている一方で、日本の現状との比較という視点に立つことはできなかった部分もある。富田は「情報」を、事実情報、分析情報、評価情報、対策情報に分類して後者ほど上位の情報と位置づけ、さらに評価情報や対策情報は自分自身を知り、社会や相手を把握しないと得られないとしている[5]。それ故今回のセミナーでは異文化に関する多くのことを学び、新鮮な驚きがあったには相違ないが、事前にもう少し現地の文化や介護に関する情報を把握しておくべきだったと思える。第1章で述べたように事前学習として文化の違いに関する講義をもうけてはいる。しかし、それだけではなくカナダの高齢者対策に関する概略を出発前に学習する必要があると感じた。第3回セント・ローレンス・カレッジ老年学セミナー報告書には、カレッジで受けた授業と、見学した施設の概要が英文及び和文で書かれているので次回はテキストとして使用できるだろう[6]。また今回は、日本人の死生観や痛みの表現についてなど、事前学習としてあらかじめ学んだ事柄については積極的に発言したり、文化の違いを実感したりすることができたようだ(分類表中＊6)。つまり、単なる驚愕や表面的な情報収集に終わらず「異なる価値観の理解と自己中心の脱却」に結びついたと言えるだろう。したがって、事前にわが国の介護の現状に関するいくつかの課題を提示することによってより充実した研修にすることができると思われる。

つぎに「異なる価値観を理解し、自己中心の発想からどれだけ脱却できたか」を評価していきたい。表を見てもわかるように、アンケートと感想文を分類するとこの部分の記述が多い。単純に、カナダのほうがよい、という印象だけで終わらせず、参加者一人一人が、それはなぜなのかということまでよく考えていると感じた。例えば参加者全員が施設の美しさと個室の家庭的な雰囲気に驚いているが(＊1)、単にそれを真似しようという考えにはとどまらず、日本の文化を学び直したい(＊4)、利用者のそれまでのライフスタイルを施設の生活に取り入れられるように活動できないか(＊5)、制限された状況の中でもできることはまだあるのではないか(＊7)などという一歩進んだ発想にたどりついたのである。また、日本の「有償ボランティア」という制度を現地のスタッフがなかなか納得できなかったという体験について学生が感想を述べていた。これも「その制度はおかしい」と考えるだけではなく、日本人の気質にあった方法ではないか、逆にやはり有償や学校教育で強制したりするのは問題があるのではないかなどと、ボランティアについて改めて考えるきっかけとなった(＊3)と言えるだろう。

最後に「積極的に、かつ効果的にコミュニケーションできたか」について述べる。特記すべきことは介護に関わる参加者であったため、コミュニケーションに関する記述が多かったということである。コミュニケーション体験の評価は、(1)積極的に相手を理解しようとしたか，(2)自分の考えを相手に伝える努力をしたか，(3)課題を正確に把握し、協力して解決にあたったかという3点から行うとよいといわれている[7]。

参加者のほとんどが英語は片言しかできず、はじめは不安が強かったようだが、やはり相手から離れてしまうのではなく、歩み寄り、非言語的コミュニケーションを多く活用して意志を汲み取ろうとする態度が非常に有効であると身を持って体験したようである(＊8)。そしてさらに、そのような体験からこの方法はカナダという土地だけではなく、どのような場面でも共通することなのだという考えにまで及んでいる(＊2)。この考えを述べた学生はコミュニケーションを在学中の研究課題にしていたため、セミナーを通して

自己の考えが深まったことも実感している。総勢わずか10名（うち2名は主催者）のセミナーに2名の通訳がいたため、それがとても頼りになったという感想があるかと期待したが、意外にもその記述はほとんどなかった。しかし、これは参加者がこれまでに培ったコミュニケーション能力を発揮して比較的良好なコミュニケーションを取ることができたためと評価できるだろう。したがって、佐野のコミュニケーション体験の評価を適用すると（1）の部分はよい評価を下せるが、英語力を必要とする（2）、（3）は今後の大きな課題となった。

以上、佐野らの異文化教育の評価にしたがって簡単に本セミナーの分析を試みた結果、比較的よい評価が得られた。そのほかに、主催者側としてセミナーを評価するために貴重な、アンケートのSuggestions for next yearには、見学施設が多かったためあわただしかったという意見が多くあった。現地学生との合同講義がもっとあるとよい、学生とレクリエーションをしたかったなどの意見も少数あったが、セミナー費用や、現地までの時間がかなりかかること、ホテルの環境、現地での移送については意見がなく問題がないものと思われた。

3．まとめ

総合的にはセミナーのプログラムは良好であるといえよう。ただ、セミナーの目的と行動目標を明文化し、評価方法を事前に決定しておくことが必要であろう。そして、施設見学に関してはあわただしさを感じることがないように次回は考慮したい。また、可能であれば現地学生との交流もさらに増やしていきたい。

天野はわが国がより開かれた社会となり人々の意識や行動がもっと「共生」や「異質との共存」の方向へ変化するために教育の力が不可欠であると述べている。そしてその際求められるのはシステム自体として広く国際的に開かれた教育であり、目標、内容、方法においては「異文化の理解」や「他者との共生」を大切なものとして追求していく教育が求められていると述べている[8)]。この観点から我々が手探りで始めたセント・ローレンス・カレッジ老年学セミナーは本学においてそのひとつの方法となっているといえるだろう。このささやかな試みが本学における教育の国際化の一助となることを願ってやまない。

最後に、この研究に付随する私自身の大きな収穫について述べたい。評価に使用した参加者の感想は第3回セント・ローレンス・カレッジ老年学セミナー報告書に収録されているが研修日程や研修内容とともに編集を行ったのは私自身である。その時もよい感想文が多いと感じた。一人一人の、一つ一つの文章を丹念に読むと、参加者の感性の鋭さ、異文化をこだわりなく受け入れる柔軟性、表現の豊かさに驚かされた。最初は何気なく読んだ学生の言葉が今は光り輝き、短期間のセミナーから自分たちの持てる力を発揮して期待した以上のものを学び取ってくれたと実感した。

文　献

1）Mark Novak and Lori Campbell, *Aging Society — A Canadian Perspective* Fourth Edition. Nelson Thomson Learning, 2001. p313

2）Charlotte Eliopoulos, *Gerontological Nursing* Fifth Edition. Philadelphia, New York and Baltimore: Lippincott, 2001. p10

3）小出まみ，他『サラダボウルの国カナダ—人権とボランティア先進国への旅』ひとなる書房，1994年，228ページ。

4）佐野正之・水落一郎・鈴木龍一『異文化理解のストラテジー —50の文化的トピックを視点にして—』大修館書店，1999年，41ページ。

5）大阪教育大学教育学部付属池田中学校 編著『オーストラリア異文化体験学習報告書 Vol..5 —自分さがしの国際共同学習—』大阪教育大学教育学部付属池田中学校，2000年，1ページ。

6）中根淳子・中根聡美 編『第3回セント・ローレンス・カレッジ老年学セミナー報告書』日加ジェロントロジー研究会，2002年。

7）佐野，前掲書，48ページ。

8）天野正治『日本とドイツ　教育の国際化』玉川大学出版部，1993年，12,13ページ。

The Evaluation for the Implementation of Gerontology Seminar Abroad

Nakane, Junko* Tanaka, Atsuko** Tanaka, Takaharu***

Three gerontology seminars for this particular program have been held at St. Lawrence College since 2000. This seminar focuses on the 3 major issues. Firstly, to clarify the actual method to implement the seminar abroad. By doing so, we can apply the result of the study as a reference for the future seminars. Secondly, to closely examine the appropriateness of the program to oversee the gerontology in Canada. Thirdly, to evaluate the program based on the responses of the questionnaire from the participants. By using the results, they can be used to improve this program. It is very critical for us to make a final decision on which college to choose. The most important point for choosing an appropriate institution for this type of non-standardized seminar is whether the institution is enthusiastic enough to deal with the difficulties they may encounter. They can think this opportunity as being beneficial to both Japan and Canada. In that respect, St. Lawrence College is the most appropriate choice. Through the careful and close-examination of the previous 3 seminars, it can be said that this program offers the opportunities for us to learn the various aspects of gerontology in Canada, and effectively promote the understanding of cross-cultural education. Although the results of the questionnaire of the participants' evaluation of the program indicates a fairly high level of satisfaction overall, it may be necessary for us to consider the number of the facilities to be visited next time.

キーワード：*老年学 (gerontology)，異文化教育 (cross-cultural education)，海外研修 (seminar abroad)，カナダ (Canada)*

*Nagoya Ryujo (St. Mary's) College
**Axess Residential Design and Research
***Nippon Institute of Technology